

会員各位

岐阜県病院薬剤師会
会長 遠藤 秀治

第 279 回岐阜県病院薬剤師会研修会開催のご案内

拝啓

時下、先生におかれましては、ますますご清祥のことと存じます。
さて、下記のとおり研修会を開催しますので、奮ってご参加頂きますようご案内致します。

敬具

記

日時：平成 25 年 8 月 24 日（土）午後 3 時 00 分より
場所：長良川国際会議場 4 階 大会議室
岐阜市長良福光 2695 - 2 電話(058) 296 - 1200

【内容】 総合司会 下呂温泉病院 薬剤部 関谷 猛

1、 会長挨拶

2、 会員発表

1. 糖尿病センターにおける薬剤師の活動～チーム医療を中心に～

木沢記念病院 薬剤部 宮内 綾子 先生

2. 抗菌薬適正使用を目指した血液培養検査 2 セット採取推進への取り組み
～ICT の啓蒙活動による向上～

高山赤十字病院 薬剤部 上田 秀親 先生

3. チーム医療推進委員会 《薬物療法 Q&A》について

チーム医療推進委員会 委員長 荻野 晃 先生

参加費：薬剤師会会員 500 円 非会員 2000 円

* 当研修会は岐阜県病院薬剤師会研修制度及び日本薬剤師研修センター研修制度に該当する研修会です。

主催 岐阜県病院薬剤師会

糖尿病センターにおける薬剤師の活動～チーム医療を中心に～

1 社会医療法人厚生会 木沢記念病院 薬剤部、2 同 看護部、3 同 内分泌代謝内科
○宮内綾子 1、今関孝子 1、加藤千恵 2、高見和久 3

【はじめに】糖尿病の治療をより良く実践するためには、患者又はその家族が疾患に対し正しい知識を理解し、積極的に治療に参加することが必要となる。当院では患者教育を目的としたチーム医療に取り組んでおり、地域における糖尿病治療の更なる充実を目指し、糖尿病センターを開設した。その取り組み内容と薬剤師の活動について紹介する。

【内容】当院において、糖尿病チームワーク医療は糖尿病マネジメント委員会（以下、委員会）が中心となって行っている。そして、本年4月に糖尿病センターが開設されたが、委員会はその中核の組織となっている。同センターはこれまでの委員会の活動を基礎として、他科との連携を密にした安全で適切な診療・教育・研究がなされることを主眼として設置された。同センターにおける薬剤師の活動内容は、①糖尿病教室・オープン教室の企画・運営・講義②患者会「みのかも会」の運営協力、みのかも会だより発行を通じての薬物療法に関する患者への情報提供③糖尿病教育入院クリニカルパスに沿った薬剤管理指導④糖尿病療養マニュアルの作成⑤委員会スタッフを対象とした事例検討会・勉強会への参加等である。このほか、同センターでは糖尿病地域連携パスの運用、糖尿病透析予防管理料の算定を実施している。また、本年度にはCGM(持続血糖測定)が導入されている。

【おわりに】今後、各スタッフ共働による患者の自己管理能力向上に対するサポート、各部署から挙げられた糖尿病治療に関するインシデント事例の解析とそれに基づいた対応策の立案・院内研修会開催による各職種の啓蒙活動、さらには退院後の薬物療法フォローアップ体制として、『お薬手帳』等のデバイスを利用した薬薬連携の実現・充実化を目指したいと考えている。

抗菌薬適正使用を目指した血液培養検査 2 セット採取推進への取り組み
～ICT の啓蒙活動による向上～

高山赤十字病院 薬剤部 上田秀親

【目的】血液培養検査の陽性率は採血量と相関し、検出された菌が汚染菌か原因菌かを特定するために 2 セット以上採取することが推奨されている。しかし、当院では 1 セット採取が散見され、血液培養陽性率と特異性の低下による診断の遅れと不適切な抗菌薬使用が危惧された。そこで ICT が介入し、血液培養 2 セット採取を院内で推進することに取り組んで向上を得たので報告する。

【方法】ICT による取り組み内容を以下にあげる。①血液培養 2 セット採取を院内で標準化することについて、ICT を中心に感染防止委員会など院内の主要な委員会に働きかけて承認を得た。②血液培養採取についての院内手順書を考案・作成し、必要部署に配布のうえ院内 web に掲載した。③勉強会の開催による周知を行なった。④平成 23 年 10 月から平成 24 年 1 月を血液培養 2 セット採取周知のための強化期間として設け、期間中は血液培養検体提出時に予め作成しておいた調査票に血液培養を行う目的と 1 セット採取の場合はその理由の記載を依頼し回収した。

【結果】ICT の取り組み後、血液培養の 2 セット採取率の向上を認めた。汚染菌としての頻度の高いことで知られる *Coagulase negative Staphylococcus* (CNS) 検出率の減少を認めた。血液培養 2 セット採取の強化期間中に 190 件の調査票を回収できた。平均年齢 64.6 歳、うち男性 116 件、女性 74 件、2 セット採血 122 件、1 セット採血 68 件であった。血液培養を行う目的は、菌血症を疑う症状がみられるため 157 件、届出が必要な抗菌薬使用前であるため 27 件、抗菌薬変更のため 18 件と続いた。1 セット採血の理由としては採血困難が 45 件と最も多かった。

【考察】ICT が作成した「血液培養の採取手順」の利用により手技の向上が得られ、周知のための強化期間内に行った調査票の提出は 2 セット採取率の向上に効果的であったと考えられた。今後もチームで啓蒙を続けこれらの維持に努めるとともに、培養結果を反映した抗菌薬の de-escalation にも深く関与していけるよう取り組んでいきたい。

学術講演会のご案内

謹啓

時下、先生におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
さて、このたび下記のとおり学術講演会を開催させていただき運びとなりました。
ご多忙中誠に恐縮に存じますが、ご出席賜りますようご案内申し上げます。

謹白

記

日時：平成 25 年 8 月 24 日（土）午後 4 時 30 分より

場所：長良川国際会議場 4 階 大会議室

岐阜市長良福光 2695-2 電話（058）296—1200

■製品紹介

『選択的 NK1 受容体拮抗型制吐剤 イメンドカプセル / プロイメンド点滴静注』

小野薬品工業株式会社

■特別講演

座長 岐阜県病院薬剤師会副会長 酒向 幸 先生

『チームと地域と科学で支えるがん薬物療法

～薬学的ケアの充実を目指して～』

滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部 教授・薬剤部長

寺田 智祐 先生

共催 岐阜県病院薬剤師会
小野薬品工業株式会社

チームと地域と科学で支えるがん薬物療法 ～薬学的ケアの充実を目指して～

滋賀医科大学医学部附属病院薬剤部

寺田智祐

がん化学療法は、2000年頃から、治療の場が入院から外来へシフトし始め、新しい業務構築が全国の病院で進んでいった。また、それと時を同じくして、多種・多様な新規抗がん剤が臨床に導入され、がん患者さんの生存期間も大きく延長するようになった。このように、診療体制や治療法がダイナミックに変化する中、医師、看護師、薬剤師らによるチーム医療の概念や実践が着実に進んできた。当初、薬剤師は、レジメン登録や抗がん剤の無菌調製など、安全管理に関わる業務の構築に大きな役割を果たしてきた。その後、インフラの整備や業務手順の標準化が進むことによって、薬剤師の業務は患者ケア、あるいはチーム医療の充実へと向かっている。副作用チェックシートを利用した職種・患者間の情報共有、外来での服薬指導、薬剤師外来、電話サポートシステム、薬薬連携の強化など、全国各地で様々な工夫や取組みがなされている。

講演では、「チームと地域と科学で支えるがん薬物療法～薬学的ケアの従事を目指して～」と題して、主に、滋賀医大や滋賀県での取組みを紹介する予定です。当日は、岐阜県病院薬剤師会の先生方と、様々な意見交換ができることを楽しみにしています。



略歴:平成6年京都大学薬学部卒業、平成11年同大学院薬学研究科博士課程修了、日本学術振興会特別研究員を経て、平成12年京大病院薬剤部・助手、平成14年マサチューセッツ総合病院・研究員、平成15年京大病院薬剤部・助手、平成20年同副薬剤部長、平成22年滋賀医大病院薬剤部教授・薬剤部長、平成24年滋賀県病院薬剤師会・会長

受賞歴:平成12年日本膜学会研究奨励賞、平成18年日本癌治療学会優秀ポスター賞、平成19年日本薬学会奨励賞、平成22年日本薬物動態学会奨励賞